

令和 6 年度
文学部・文学研究科
自己点検・評価報告書
【教育／研究】

令和 7 年 3 月
文学部・文学研究科

R6 年度文学部・文学研究科自己点検・評価報告書

1－1 学位授与方針

(学部ディプロマ・ポリシー)

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/graduate-school-of-letters/>

(大学院ディプロマ・ポリシー)

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/graduate-school-of-letters/>

1－2 教育課程方針

(学部カリキュラム・ポリシー)

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/faculty_of_letters/curriculum_policy_undergraduate/

(大学院カリキュラム・ポリシー)

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/graduate-school-of-letters/>

1－3 教育課程の編成、授業科目の内容

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 全学共通科目等への科目提供を通じ、学際的視野を身につけるための学習機会を提供する。

《大学院》

- ② 他部局との協力関係に基づき、多様な学問的ニーズに対応した教育プログラムを提供する。
- ③ ハイデルベルク大学との修士国際共同学位課程（文化越境専攻）の運営により、長期にわたる国際的な学習経験を積ませるための学位プログラムを提供する。

〈成果〉

《学部》

- ① 全学共通科目を計 37 科目（提供要請科目 27 科目／提供要請科目以外 11 科目／外国人教員（大学改革教科推進事業）担当科目 9 科目）を開講し、全学共通科目の充実に積極的に協力した。全学共通教育における特定外国語教員等による授業提供を行い、多言語教育等の充実に協力した。また、主に初年次生対照の文学部の授業として、専門課程への橋渡しとしての機能を持つ「系ゼミナール」を開講した。

《大学院》

- ② 文学研究科と人文科学研究所との協力関係について、協議し、活動を検証した（令和 6 年 12 月 19 日）。研究科横断型教育科目として 3 科目を開講した。また、経済学研究科との連携に取り組み、国際文化越境専攻において経済学研究科から 5 科

目、教育学研究科から1科目の提供を受けた。

- ③ ハイデルベルク大学との修士国際共同学位課程に、京大側5名、ハイデルベルク大学側5名が入学した。2025年度国際文化越境専攻の募集要項について審議・決定した。

〈根拠資料〉

《学部》

① (全学共通科目)

- ・ 令和6年12月5日運営委員会資料
- ・ 京都大学国際高等教育院シラバス (<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/list>)
- ・ 「英語で学ぶ全学共通科目 Liberal Arts and Science to learn in English 2025」(京都大学国際高等教育院発行) (<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/download/introduction/syllabus.pdf?1603883228>)

(系ゼミナール)

- ・ 文学部シラバスの対象ページ (https://www.k.kyoto-u.ac.jp/external/open_syllabus/search?condition.departmentNo=1&condition.openSyllabusTitle=&condition.courseNumberingJugyokeitaiNo=&condition.courseNumberingLanguageNo=&condition.semesterNo=&condition.courseNumberingLevelNo=&condition.courseNumberingBunkaNo=&condition.teacherName=&condition.keyword=%83%5B%83%7E%83i%81%5B%83%8B&x=0&y=0)

《大学院》

② (研究科横断型教育科目)

- ・ 大学院共通科目群シラバス→ (<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/for-internal/daigakuin/kyotsu>)
- ・ 大学院横断科目群シラバス→ (<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/syllabus/course-list?condition%5Bcondition.familyFieldName%5D=%E4%BA%BA%E6%96%87%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%B3%BB>)

(他部局からの授業提供)

- ・ 「令和6年度文学研究科開講科目一覧」『令和6年度学生便覧』36～59ページ (<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/bun-student-handbook.pdf>)

③ (入学予定者の共有)

- ・ 令和7年3月7日教授会資料
(募集要項)

1－4 授業形態、学習指導法

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 全学共通科目への授業提供を通じ、アクティブラーニングの推進に貢献する。
- ② オンライン公開講座等、ウェブ上での教材提供を通じ、現代社会のニーズに応じた教育活動を展開する。

《大学院》

- ③ 若手研究者に大学での教育実践の場を提供する。

〈成果〉

《学部》

- ① 全学共通科目 ILAS セミナーに 12 科目（「Critical Thinking in Ethics（倫理学における批判的思考）」「Scripts and Written Artefacts（文字と書かれた遺物）」「エスペラント入門」「キリスト教学入門」「人文・社会科学の古典を読む」「動物と私たち－利用、福祉、倫理」「哲学と社会価値——人文系産官学連携の最前線——」「文学とは何か ヴァレリー対ブルトン」「文系・理系について考える」「日本近世地域史入門」「科学と疑似科学の間」「西洋古典学入門」）を提供し、主に 1, 2 回生を対象に、専門性の高いアクティブラーニングの機会を提供した。
- ② 文学研究科公開シンポジウム「テキストとイメージから探る自他認識と世界観」に本研究科の教員 2 名（田中和子名誉教授、出口康夫教授）が登壇した。人文知連携拠点において、教員 1 名（藤本花音助教）が「文系のためのゲームエンジン「Unity」ワークショップ」を提供した。また、ぶんこもにおけるブックトークおよびワークショップ「ソーシャルビジネスを知ろう」に教員 4 名（岸政彦教授、大河内泰樹教授、児玉聡教授、安里和晃准教授）が公開講座を提供した。

《大学院》

- ③ 若手研究者である PD・OD による連続「系ゼミナール」を前・後期に開講した。この授業の一部は、高等教育研究開発推進センターの支援を受け、文学研究科と FD 研究検討委員会が共同主催する「文学研究科 OD による連続公開ゼミナールとその検討会」として、プレ FD の機能も併せ持っており、プレ FD の事後研修会（2 月 13 日）を開催し、グループワークを通じて授業の進め方について研鑽を深めた。

〈根拠資料〉

《学部》

① (ILAS セミナー)

- ・ 令和 5 年 1 月 2 2 日第 4 回教務委員会資料 (令和 6 年度全学共通科目開講科目設計一覧)
- ・ 京都大学国際高等教育院シラバス (<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/list>)

《大学院》

② 文学研究科・文学部公開シンポジウム

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/events/2024symposium/>

人文知連携拠点「文系のためのゲームエンジン「Unity」ワークショップ」

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/kyoten/>

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/#news>

ぶんこも開催イベント

<https://buncomo.jp/event/>

③ プレ FD 事前ミーティングプログラム、事後研修会プログラム、事後研修会 PPT

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/letters/>

[https://sites.google.com/view/bun-](https://sites.google.com/view/bun-pff/%E4%BB%8A%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E3%81%AE%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0)

[pff/%E4%BB%8A%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E3%81%AE%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0](https://sites.google.com/view/bun-pff/%E4%BB%8A%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E3%81%AE%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0)

1-5 履修指導、支援

《特記事項》

〈取組〉

《学部・大学院共通》

- ① 学習についてだけでなく、学生の様々な相談に応じる窓口を設置して、学生が安心して勉学に取り組むことのできる環境の構築を目指す。

《学部》

- ② 入学時、系分属申請前、専修分属申請前にそれぞれガイダンスを実施し、自学自習の理念のもと、学生が学びの進路を自分自身で決定できるよう支援する。
- ③ 経済的支援が必要な学生に対し、必要な情報を提供するとともに、推薦状の執筆等を通して教員が積極的に奨学金獲得を支援する。

《大学院》

- ④ 大学院生に各種奨学金の情報を提供するとともに、教員が奨学金獲得を積極的に支援する。

〈成果〉

《学部・大学院共通》

- ① 学生相談室では、対面と ZOOM での面談を実施するとともに、対面での面談につ

いては細かく感染症対策を定めて実施しつつ、相談室に関する情報を SNS でも発信した。また、学生相談室主催の茶話会、遠足等のイベントを開催した。「先輩相談室」の活動も継続して行った。

《学部》

- ② 4月に新入生ガイダンス、9月に2年次生向けの系分属ガイダンス、および、3年次生向けの専修分属ガイダンスをそれぞれ実施した。
- ③ 教員に奨学金獲得のための支援、協力を要請した。具体的には、学生支援委員会を開催し、担当学生のための推薦書の執筆等を教員に依頼した。

《大学院》

- ④ 各種奨学金や日本学術振興会特別研究員への応募を希望する学生のため各教員が推薦書・評価書を作成した。さらに、京都大学大学院教育支援機構プログラムについてHPでの案内を行うとともに、KULASIS メールでの周知をはかった。学振特別研究員については、DC1の申請者のうち9名が、DC2の申請者のうち10名が採択された。

〈根拠資料〉

《学部・大学院共通》

- ① 京都大学文学研究科・文学部学生相談室 HP (https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/for_students/%E7%9B%B8%E8%AB%87%E5%AE%A4/counseling_room/)
京都大学文学研究科・文学部先輩相談室 HP (http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/gakuseisoudan/gsp-top_page/)

《学部》

- ② (新入生ガイダンス)
国際高等教育院 HP 内「各学部のガイダンス」(<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/freshman-guide/schedule/faculty>)
(系・専修分属ガイダンス)
令和6年7月18日教授会資料

《大学院》

- ④ (学振特別研究員)
 - ・ 大学 HP「学術振興会特別研究員」(<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/recruit/scholar/jsps#anchor2>)
 - ・ 「令和6年5月9日運営委員会資料(資料10)」
(大学院教育支援機構プログラムによる研究奨励費等支援の募集)
 - ・ 令和6年3月12日付、教務掛発信の教員あてメール

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 学部授業評価アンケートを実施して教育方法、成績評価のあり方について検証し、必要があれば見直しを行う。

《大学院》

- ② 大学院修士課程授業評価アンケートを実施して教育方法、成績評価のあり方について検証し、必要があれば見直しを行う。

〈成果〉

《学部》

- ① 前期および後期末に授業アンケートを実施し、その結果と講評を教授会で共有した。

《大学院》

- ② 前期および後期末に授業アンケートを実施し、その結果と講評を教授会で共有した。

〈根拠資料〉

《学部》

- ① 令和6年10月17日教授会資料、令和7年4月17日教授会資料

《大学院》

- ② 令和6年10月17日教授会資料、令和7年4月17日教授会資料

1－7 卒業（修了）判定

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 各年度に提出される卒業論文の内容を部局が設定する評価基準と照合し、評価の公正性を担保する。

《大学院》

- ② 各年度に提出される修士論文の内容を部局が設定する評価基準と照合し、評価の公正性を担保する。

〈成果〉

《学部》

- ① 個々の評価基準をクリアした卒業論文の数を各専修が報告し、これを自己評価担当副研究科長が取り纏めて教授会で情報を共有した。

《大学院》

- ② 個々の評価基準をクリアした修士論文の数を各専修が報告し、これを自己評価担当副研究科長が取り纏めて教授会で情報を共有した。

〈根拠資料〉

《学部》

- ① 令和6年6月20日教授会資料

《大学院》

- ② 令和6年6月20日教授会資料

1－8 学生の受入

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 優秀な学生の確保に向け、学部の教育プログラムを周知させるための広報活動を含め、各種の施策を講じる。

《大学院》

- ② 優秀な学生の確保に向け、大学院の教育プログラムを周知させるための広報活動を実施する。
- ③ AAOと緊密な連携を取りながら、優秀で熱意のある留学生を積極的に受け入れる。
- ④ 大学院における女子学生、留学生の割合を増加させるため、夏期入試の実施等の施策により、幅広い層の受験者を確保する。

〈成果〉

《学部》

- ① 部局のHP内でカリキュラムについて説明するとともに、8月8日に開催されたオープンキャンパス2024(来場型開催)に参加し、学部の説明、各系の説明、特色入試の説明、ミニレクチャー、研究室訪問、図書館ツアー、学生による質問・相談コーナーなどを提供した。なお、部局HPは2024年4月から全面リニューアルされ、視認性が大幅に向上している。

また、広く優秀な人材を集めるため特色入試に参加しており、R6年4月16日に執行部教員と令和5年度および令和6年度の特色入試委員長からなる会合を開催し、令和7年度の特色入試のあり方について検討した。さらに、特色入試により入学した学生について卒業時の成績や卒業後の進路などを調査・分析し、同制度の有効性を検証した(資料非公開)。

《大学院》

- ② 複数の専攻または専修が大学院進学説明会を開催し、大学院の教育プログラムおよび入試関連情報の発信を行った（社会学専修 4 月 29 日（対面・オンライン）、思想文化学専攻 5 月 11 日（オンライン）、国際連携文化越境専攻 7 月 19 日（オンライン）、歴史文化学専攻・現代史学専修 9 月 18 日（対面・オンライン）、メディア文化学専修 9 月 25 日（対面・オンライン）、美学美術史学専修 11 月 1 日（オンライン）、文献文化学専攻 3 月 13 日（対面・オンライン））。説明会の開催については HP で周知をはかった。各説明会の参加者数または申込者数は次の通りである。
- ・ 社会学専修：104 名（申込者数。学外 92 名、オンライン 87 名）
 - ・ 思想文化学専攻：121 名（参加者数）
 - ・ 国際連携文化越境専攻：28 名（参加者数。全て学外）
 - ・ 歴史文化学・現代史学：124 名（申込者数。学外 100 名、オンライン 61 名）
 - ・ メディア文化学専修：70 名（申込者数。学外 64 名、オンライン 56 名）
 - ・ 美学美術史学専修：41 名（うち学外者 37 名）
 - ・ 文献文化学専攻：37 名（参加者数。オンライン 23 名）
- ③ AAO を通じて、海外の大学卒業者の受け入れを行った（入学希望があった者延べ 261 人、入学を許可された者 42 人、入学した者 38 人、辞退者 4 人）。また、タリン大学人文学科、ワルシャワ大学、北京大学中国語文学系・歴史系・哲学系（宗教学系）と部局間学生交流協定が締結された。
- ④ 8 月 5 日（一次試験）、8 月 7 日（二次試験）に修士課程思想文化学専攻・行動文化学専攻の夏期入試を実施した。

〈根拠資料〉

- ① （カリキュラムの広報）
<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/admission/>
 （オープンキャンパス）
 令和 6 年 5 月 23 日教授会資料
 （特色入試）
 令和 6 年 2 月 10 日教授会議事録
- ② （大学院進学説明会）
<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/news/category/admission>
<https://www.cats.bun.kyoto-u.ac.jp/jdts/events/2024/04/online-student-orientation-2024-07-19/>
- ③ （留学生受け入れについての共有）
- ・ 令和 6 年 4 月 18 日教授会資料、令和 6 年 5 月 23 日教授会資料、令和 6 年 6 月 20 日教授会資料、令和 6 年 7 月 18 日教授会資料、令和 6 年 9 月 19 日教授会資料、令和 6 年 10 月 17 日教授会資料、令和 6 年 12 月 19 日教授会資料、

令和 7 年 1 月 23 日教授会資料、令和 7 年 2 月 20 日教授会資料、令和 7 年 3 月 7 日教授会資料

(部局間学生交流協定について)

令和 6 年 5 月 23 日教授会資料、令和 6 年 11 月 21 日教授会資料、令和 7 年 3 月 7 日教授会資料

④ (夏期入試)

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025-apply-master-summer.pdf>

2 - 1 卒業(修了)率、資格取得等

《特記事項》

〈取組〉

《学部》

- ① 学部卒業生アンケートを実施して学修成果を調査し、教育方法を検証するとともに、必要があればその改善を行う。
- ② 学生の資格取得を支援するため、資格取得に必要な授業を提供する。

《大学院》

- ③ 大学院修了生アンケートを実施して学修成果を調査し、教育方法を検証するとともに、必要があればその改善を行う。

〈成果〉

《学部》

- ① 学部卒業生アンケートを実施し、その結果と講評を教授会で共有した。
- ② 学芸員、社会調査士の資格取得に必要な科目を開講した。

《大学院》

- ③ 大学院修了生アンケートを実施し、その結果と講評を教授会で共有した。

〈根拠資料〉

《学部》

- ① 令和 6 年 6 月 20 日教授会資料
- ② (学芸員)
 - ・ 『令和 6 年度学生便覧』120～121 ページ
(社会調査士)
 - ・ <https://www.jcbsr.jp/display.php?org=137>

《大学院》

- ③ 令和 6 年 6 月 20 日教授会資料

2 - 2 就職、進学

《特記事項》

〈取組〉

《学部・大学院共通》

- ① キャリアガイダンス等の実施により、学生の卒業後のキャリア形成を支援する。

〈成果〉

《学部・大学院共通》

- ① 9月21日、キャリアガイダンスを開催し、企業も参加してインターンシップに関する説明等を行った。学部生・院生計27名、企業9社の参加があった。
- 11月17日、文学研究科・文学部主催の就職活動体験報告会を行った。在学生の就職活動体験報告と卒業生による講演、並びに交流会がオンラインで行われた。
- オンラインキャリアガイダンスおよび就職活動体験報告会について、10月17日教授会で報告した。また、後者については、オンラインキャリアガイダンスの報告をした際に予告し、周知徹底を要請した。

〈根拠資料〉

《学部・大学院共通》

- ① (キャリアガイダンスについて)
- ・ キャリアガイダンスのポスター
 - ・ オンラインキャリアガイダンス受付開始に関する KULASIS メール (7月9日に学生用 KULASIS 向けに一斉配信)
 - ・ オンラインキャリアガイダンスの報告：令和6年10月17日教授会議事録
 - ・ オンラインキャリアガイダンスに併せ実施された企業インタビューアンケートの結果共有：令和6年12月19日教授会議事録
- (就職活動体験報告会について)
- ・ 文学部・文学研究科就職活動体験報告会実施要項
 - ・ 就職活動体験報告会に関する KULASIS メール(11月5日に学生用 KULASIS 向けに一斉配信)

3-1 研究の実施体制及び支援・推進体制

《特記事項》

〈取組〉

- ① 文学研究科内に設置された〈応用哲学・倫理学教育研究センター〉、〈アジア親密圏/公共圏教育研究センター〉、〈文化遺産学・人文知連携センター〉のそれぞれが中心となって研究活動を推進し、その成果を広く外部に発信する。
- ② 国内外の研究機関との間で積極的に学術、研究交流を実施し、研究活動における国際的競争力の維持、発展に努める。

③ 若手研究者の研究活動を支援し、次世代の人文科学研究者の育成を行う。

〈成果〉

① 各センターが実施した研究活動の成果は下記の通りである：

【応用哲学・倫理学教育研究センター】

2024年4月22日 第215回 CAPE レクチャーを開催。

2024年5月20日 第216回 CAPE レクチャーを開催。

2024年6月17日 ワークショップ “*We’s Discussion on Self-as-We: The Advocate meets the Critics II*” を開催。

2024年6月26日 第217回 CAPE レクチャーを開催。

2024年6月28日 第218回 CAPE レクチャーを開催。

2024年7月3日 第219回 CAPE レクチャーを開催。

2024年7月23日 第220回 CAPE レクチャーを開催。

2024年7月24日 第221回 CAPE レクチャーを開催。

2024年9月3日 第222回 CAPE レクチャーを開催。

2024年9月16日 第223回 CAPE レクチャーを開催。

2024年10月16日 第224回 CAPE レクチャーを開催。

2024年10月21日 *International Symposium on Ethics in Information Technology and Robotics* を開催 (Organizer(s): Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG, German Research Foundation), DWIH Tokyo (German Centre for Research and Innovation Tokyo), Center for Applied Philosophy and Ethics (CAPE), Kyoto University)。

2024年10月23日 第225回 CAPE レクチャーを開催。

2024年11月6日 第226回 CAPE レクチャーを開催。

2024年11月27日 第227回 CAPE レクチャーを開催。

2024年12月4日 第228回 CAPE レクチャーを開催。

2025年1月25-26日 *Exploratory workshop: Literature and / or / as Philosophy* を開催。

2025年2月13日 *Kyoto Workshop on Wittgenstein* を開催。

2025年2月19日 第230回 CAPE レクチャーを開催。

2025年2月27日 ワークショップ *Philosophical Issues at the End of Life* を開催。

2025年2月28日 *The Philosophy of Criticism* を開催。

2025年3月1日 Book Symposium on “*Toward a Contextual Realism*” を開催。

2025年3月4日 第231回 CAPE レクチャーを開催。

2025 年 3 月 10 日 共催シンポジウム「防災と倫理： 阪神淡路大震災からの 30 年で日本の防災はどこまで前進したのか」を開催（阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターとの共催）。

2025 年 3 月 14 日 共催ワークショップ「Ethics of WE」を開催（JSPS 課題設定/出口「よりよいスマート WE を目指して」、学術変革 B「ディストピア倫理学：自己の境界を不確定にする未来テクノロジーに向けて」、JST/太田「ヒト脳改変の未来に向けた実験倫理的 ELSI 研究方法論の開発」との共催）。

2025 年 3 月 18 日 第 232 回 CAPE レクチャーを開催。

【アジア親密圏/公共圏教育研究センター】

2024 年 7 月 31 日 特別講演” *The Logic and Risk of Compressed Modernity: East Asia and Beyond* ”を開催（京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）・社会学研究室との共催）。

2024 年 12 月 16 日 「第 6 回 Welcome to 社会学」を開催

【文化遺産学・人文知連携センター】

（人文知連携拠点）

2024 年 6 月 19 日（水） 東アジア「間文化」第 20 回研究会を開催。

2024 年 7 月 17 日（水） 東アジア「間文化」第 21 回研究会を開催。

2024 年 9 月 22 日 KUDH Basics: デジタル・ヒューマニティーズ 「近現代日本文学作品の言語学的分析アプローチ」ワークショップを開催。

2024 年 9 月 26 日 KUDH Basics: 文系のためのゲームエンジン「Unity」ワークショップを開催。

2024 年 11 月 7 日（木） 東アジア「間文化」第 22 回研究会を開催。

2024 年 11 月 26 日 東アジア「間文化」第 23 回研究会を開催。

2024 年 12 月 8 日 東アジア「間文化」第 24 回研究会を開催。

（京大文化遺産調査活用部門）

2024 年 5 月 7 日 「京都大学構内遺跡調査研究年報 2023 年度」を刊行。

2024 年 5 月 7 日 講演会資料「比叡山麓の縄文世界－比叡山西南麓の遺跡を中心に－」および 講演会資料「比叡山東麓の縄文遺跡－大津市域の集落動向－」をホームページ内に掲載。

2024 年 5 月 15 日 講演会資料「滋賀里 255 号甕棺墓－縄文時代晩期のある新生児の吊い－」および 講演会資料「縄文時代の人口－比叡山麓の事例研究－」をホームページ内に掲載。

2024 年 8 月 8 日～8 月 9 日 京都大学オープンキャンパス 2024／キャンパスツアー（文系）にて「尊攘堂」を公開。

2024 年 9 月 25 日～9 月 27 日 文学研究科附属文化遺産学・人文知連携セン

ターの5周年を記念して「尊攘堂」を期間限定公開。

2024年11月2日 京都大学ホームカミングデイの一環として「尊攘堂」を一般公開。

2024年12月5日～2025年2月4日 京都大学病院西構内（聖護院川原町遺跡）にて発掘調査を実施。速報をホームページ内「発掘速報」欄に掲載。

2025年2月10日～ 京都大学医学部構内（吉田橋町遺跡）にて発掘調査を実施。速報をホームページ内「発掘速報」欄に掲載。

2025年3月19日（水）～ 2025年5月11日（日） 京都大学総合博物館
2024年度特別展「文化財発掘XI 吉田遺産探訪－遺跡・古図・剣鉾－」を開催。

（内陸アジア学推進部門）

2024年7月6日 第91回定例講演会を開催。

2024年7月29日～31日 夏季満洲語セミナー2024を開催。

2024年11月23日 第92回定例講演会を開催。

2025年3月15・16日 第23回中央アジア古文書研究セミナーを開催（科研費（基盤研究(B)）「ロシア帝国領中央ユーラシアにおける家族と家産継承」（代表：磯貝健一）との共催）。

- ② 国内外の研究機関との間で行った主たる学術、研究交流および成果は下記のとおりである：

【応用哲学・倫理学教育研究センター】

2024年10月21日 *International Symposium on Ethics in Information Technology and Robotics* を開催（Organizer(s): Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG, German Research Foundation), DWHI Tokyo (German Centre for Research and Innovation Tokyo), Center for Applied Philosophy and Ethics (CAPE), Kyoto University）。

2025年3月10日 共催シンポジウム「防災と倫理： 阪神淡路大震災からの30年で日本の防災はどこまで前進したのか」を開催（阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターとの共催）。

2025年3月14日 共催ワークショップ「Ethics of WE」を開催（JSPS 課題設定/出口「よりよいスマート WE を目指して」、学術変革 B「ディストピア倫理学：自己の境界を不確定にする未来テクノロジーに向けて」、JST/太田「ヒト脳改変の未来に向けた実験倫理的 ELSI 研究方法論の開発」との共催）。

【文化遺産学・人文知連携センター】

2024年7月29日～31日 夏季満洲語セミナー2024「満洲語檔案に記録されたユーラシア中央域の世界」を開催（追手門学院大学文学部との共催）。

【京都大学戦略的パートナーシップ協定に基づく共同研究】

Collaborative Research on Logic of Agent: From Non-classical Perspectives (国立台湾大学、台湾)

- ③ 部局独自のアカデミックフェロー制度に基づき、アカデミックフェロー（6名、うち女性は2名、外国人は2名）を受入れた。

「卓越した課程博士論文の出版助成事業」に参加した。本研究科では若手研究者7名の出版が審査の上、決定し、若手研究者の社会や世界におけるプレゼンスを高める出版助成事業の促進を図った。

若手研究者の研究活動支援を主目的として、人文学連携研究者（7名、うち女性は4名、外国人は1名）を受入れた。

〈根拠資料〉

- ① および②

(応用哲学・倫理学教育研究センター)

<http://www.cape.bun.kyoto-u.ac.jp/capes/>

<http://www.cape.bun.kyoto-u.ac.jp/capes/ws/>

(アジア親密圏/公共圏教育研究センター)

<https://www.arcip.bun.kyoto-u.ac.jp/>

(文化遺産学・人文知連携センター)

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/>

- ③ (アカデミックフェロー)

- ・ 総務掛提供資料

(出版助成事業)

- ・ 令和6年6月教授会資料

(人文学連携研究者)

- ・ 令和6年1月教授会資料、総務掛提供資料

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/renkei/>

3-2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上

《特記事項》

〈取組〉

- ① e-learningの実施等の施策を通じ、教員、学生の間で高いレベルでのコンプライアンス、研究者倫理が共有される環境を構築する。

〈成果〉

- ① 4月25日付教員・研究員宛メールにて、すべての研究者（大学院生を含む）及び授業を行う教員を対象に、APRIN eラーニングプログラム「京都大学全学共通基礎コ

ース（2024）」の受講を求めた。また、修士論文と課程博士論文の提出予定者を対象とする研究公正チュートリアルの実施および確認書・宣誓書を確実に提出するよう、一斉メールおよび教授会での研究科長からの要請などにより、教員への周知を徹底した。

〈根拠資料〉

①（e-learning 実施の要請メール）

令和 6 年 4 月 25 日付文系総務課総務・国際掛（A10soumu-ml@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）発信メール

（研究公正チュートリアル）

- ・ 修士論文提出者への「研究公正に関する宣誓書」添付告知：『令和 6 年度学生便覧』75 頁
- ・ 研究科長からのチュートリアル実施要請：令和 6 年 6 月 20 日教授会議事録
- ・ 課程博士論文提出者への注意喚起：

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/student/doctoral-dissertation/>

3－3 論文・著書・特許・学会発表など

《特記事項》

なし

3－4 研究資金

《特記事項》

なし

4－1 研究業績説明書

（当該学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準）

本学部・研究科は、京都大学創立以来の自由の学風を継承し、他の学問分野との調和や融合をはかりながら、哲学・歴史学・文学・行動科学の各分野における最高水準の研究に基づく研究、教育を推進し、その成果を通じて人類の調和ある共存に貢献する、という目的を有しており、人間の諸活動の原理的な解明と、絶えず変化する環境のなかでその諸活動が有する価値を問い直す研究を実践する、という特色がある。したがって、研究のテーマが、さまざまな現象や言説の単なる表面的な解釈や理解にとどまらず、人間の諸活動を原理的に解明し、さらにその諸活動が有する価値をも問い直すものである、という点が最も重要であると考えている。また、その成果が、我が国の社会の課題解決・文化の発展への貢献、さらには人類の調和ある共存に積極的に貢献するものである、という点も考慮している。それらを踏まえ、その研究が当該分野の学術自体を高度に発展させる内容をもつこと、さらにその研究によって得られた成果が、人文学におけ

る現時点での世界最高水準に到達した研究と認めら、かつ、人類の調和ある共存に積極的に貢献するものである、という判断基準で研究業績を選定している。

選定した研究は別ファイル「令和 5 年度 研究業績説明書」に記載する。

《特記事項》

なし

4－1 研究業績説明書

氏名:埴淵知哉

テーマ：

デジタル環境における地理的社会調査の方法論とその実践

要旨：

本研究は、デジタル環境を活用した地理情報・社会調査データの収集とその分析を進め、都市地理学をはじめとする多様な実証研究の基盤を構築するものである。とくに、インターネット調査による詳細住所情報を含む個票データ収集と、シチズンサイエンスを応用した街路景観画像の収集に関する方法論的な基礎研究を進めた。またそれらを通じて得たデータの統計分析も進め、都市居住者の幸福感や地域への愛着などが居住地域の環境要因と複雑に関連し合う様子を明らかにした。

《判断根拠》

学術的意義：

近年、従来型の社会調査に対する協力度の低下などが課題となる一方で、デジタル環境の浸透に伴い多種多様なデータ収集の可能性が飛躍的に高まっている。こういった新たな手法は大規模かつ効率的なデータ収集を可能にするとともに、調査であることを意識させない観察など、従来とは異なる性質のデータ収集をも実現しうる。従来の地理学における研究データは集計的で時空間的な解像度の低いものが多かったが、本研究はデジタル環境を活用した地理的社会調査の方法論的な拡張可能性を、データの収集と分析の実践を通じて議論している。そして、実際に収集された回答データや景観画像をもとに人間と環境の複雑なかかわりの一端を描き出し、その有用性を具体的に示した点にも学術的な意義が認められる。

《代表的な研究成果・成果物(最大3点)》

埴淵知哉・村中亮夫 2024. インターネット調査における回答デバイスと回答の質—スマートフォンに注目した分析. 季刊地理学 76(3): 120-125.

埴淵知哉 2024. 地図・地理情報と生成 AI. MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY 42(3): 94-99.

梅田華蓮・埴淵知哉・谷本 涼・中谷友樹 2024. 都市居住者の主観的幸福感に関連する近隣の客観的・認知的環境要因の分析. 季刊地理学 76(3): 106-119.

氏名:河島思朗

テーマ：

古代ローマにおける黄金期ラテン文学の社会的意義をめぐる研究

要旨：

ラテン文学黄金期（前1世紀頃）の詩人たちは「予言詩人」と呼ばれ、古代ローマ社会において特別な存在であった。本研究はこの予言詩人がいかなる社会的意義を有していたかについて、ラテン文学を代表する3人の詩人ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスを中心に考察するものである。本研究の結果、予言詩人たちは政治的指導者層からも、民衆からも独立し、社会を俯瞰する立場から作品を作り上げていることが解明された。

《判断根拠》

学術的意義：

従来、ラテン文学研究においては、作品そのものに依拠した解釈が主流であったが、近年では社会との関連性を重視する研究が増加している。しかし、その議論における「社会」とは、主に政治的指導者層に限定され、考察の範囲は狭く、また作品理解においてもその範疇にとどまるものであった。特に、作品が初代皇帝アウグストゥスの政策に対して批判的であるか、あるいは擁護的であるかという点に焦点が当てられてきた。これに対し、本研究はローマ社会全体に視野を広げ、指導者層のみならず民衆も含めた社会的背景の中で作品を捉える点で、従来の研究とは一線を画している。また、文学作品をローマ文化全体の文脈のなかで解釈し、文学伝統・神話・社会的メッセージ、さらには後世への影響といった多角的な視点から分析を行っている。これにより、予言詩人の創作活動に新たな光を当てるとともに、個々の作品に関して新たな解釈を提示した点で、高く評価できる。

《代表的な研究成果・成果物(最大3点)》